猫との暮らし

公益委員　田中　佐和子

今年もあと３か月ほどになりました。

台風が接近し，朝晩には涼しい風が吹くようになり，確かに季節は進んでいると感じる一方，年明け早々から新型コロナウイルスの話題が続いているせいか，なかなか時間が過ぎた実感を持てずにいます。

新型コロナウイルスに関しては，労働分野の解雇，緊急事態宣言や自粛による売上減などの深刻なものをはじめとして，誰しも何かしらの影響を受けていることでしょう。

私自身は，外出時のマスク着用にようやく慣れつつ，初めての ZOOM 会議や毎朝時計代わりになんとなくつけていたテレビを見なくなったことで朝のヨガが習慣になるなど新しい日常が生まれる一方で，毎日夕食時に食事の付き添いをしていた母との面会が禁止になるという気がかりをかかえることになりました。

母親には認知症の症状があるので，毎日顔だけは見せようと思い，幸い１階にあるダイニングでの夕食時に，施設の了解のもと庭からサッシ越しに手を振り，手を振り返してくれる母を見てほっとしながらも，やはり近くで様子を確認できない不安は続いています。

そんななか，ほとんど変わりがないのが，猫たちとの暮らしです。

小学生のときに初めて犬を飼ってから今までずっと犬か猫（ときにはどちらも）がいる生活を送っています。

今は１１匹の猫たちと暮らしています（鹿児島市への届出はしています）。

みんな住み着いたり拾ったりで，避妊・去勢手術の際に獣医さんに聞いた推定年齢しかわからず子猫のころを知る猫はいません。

つい先週までは１２匹でしたが，推定年齢１７歳の猫が亡くなり，１１匹になりました。

６月にリンパ腫だろうと診断されましたが無理な治療はせず，通院と投薬のみしていましたが，亡くなる当日の朝までよく食べ，私が仕事から帰るのを待っていたようにして旅立ちました。

猫なので，今までと同じように看取り，お葬式をすることができましたが，一方で大切な人を亡くしながら，看取ることも心ゆくまで見送ることもできない大勢の人たちがいるという今の状況に胸が痛みました。

もともと，何のつながりもない猫たちが相性の良いもの同士はとても仲良く，それほどでもない同士も，お互いにほどよい距離感で穏やかに暮らしているのを見ているだけで幸せな気持ちになっていましたが，とくに新型コロナウイルスで世間がざわつく昨今は，猫たちがいてくれることで心が安らぐと感じています。

この先，新型コロナウイルスのある日常がどのようなものになっていくのかはまだ不透明ですが，猫たちとの変わらない暮らしを大切にしながら，新しい日常に順応していこうと思う今日この頃です。